鹿児島県立鶴丸高等学校広報紙

好学愛知
自律敬愛
質実剛健

鶴信

第１３９号　R元．８．２３

鹿児島県立鶴丸高等学校
〒890-8502　鹿児島市薬師二丁目１番１号
TEL 099-251-7387 FAX 099-255-3433
http://www.edu.pref.kagoshima.jp/sh/Tsurumaru/top.html

９月の行事予定

		９　月		食堂
1	日			×
2	月	学年朝会　スクールカウンセリング 全学年体育祭練習(5,6限)係会(7限)		○
3	火	1，2年体育祭練習(6,7限)		○
4	水	体育祭準備・予行(3年1限授業)		○
5	木	体育祭予行予備日		○
6	金	1,2年合同練習(6，7限) 3年実力考査時間割発表		○
7	土	第71回体育祭		×
8	日	体育祭予備日		×
9	月	体育祭代休日		×
10	火	学校安全の日		○
11	水			○
12	木			○
13	金	3年実力考査(1日目)		○
14	土	1年GO鶴セミナー 2年GO鶴セミナー発表 3年実力考査(2日目)	授業日	×
15	日			×
16	月	敬老の日		×
17	火	学年会　40分7限授業		○
18	水	スクールカウンセリング		○
19	木	職員会議　40分7限授業 月曜日の授業		○
20	金			○
21	土			×
22	日			×
23	月	秋分の日		×
24	火	前期終業式　大掃除 (通知表発送)　1･2年学力検討会		×
25	水		秋季休業日	×
26	木			×
27	金			×
28	土			×
29	日			×
30	月			×

限られた時間の中で

二学年主任　徳留　健作

玄関のドアを開けると、今年も蝉の大合唱。鳴くのはどうも雄だけらしい。蝉の一生は儚いものである。地中で二年から六年ぐらいかけて成長し、地上に出てから約一ヶ月。成虫になり約一週間、雌を求めて鳴き、うまく出会うと雌が卵を産み、子孫を残すとその短い生涯を終える。

二年生の英語の自主教材に次のような話がある。筆者は大学を出て就職したが、どうも体の調子がよくない。調べても病名が分からず、死ぬのではないかという危機感を覚える。よくよく考えてみると、その原因は自分の夢と仕事とのギャップにあり、心の病だと気づく。そこで心配した母親から送られてきた「チベット人の死生観」という本を読むと、「あなたは今日が地球の最後の日だという思いで、今日という日を生きているか」という問いに出会う。死を恐れるのではなく、死ぬ時に自分がなっていたい自分になるように努めよという教えを受け、筆者は今の仕事をやめ、夢だった小説家になる道を歩み始めるというものだった。蝉が自分の一生を悟って、あのような大音量で雌を求めて鳴いているのかどうかは分からないが、人は終わりから逆算して物事を考えることができる。限られた時間の中で、どう生きればいいのかを自分で決めることができるのだ。

今年の第百一回全国高校野球選手権大会も面白かった。勝敗に関わらず最後まで全力でプレーする球児の姿に感動を覚える。その出場校を調べてみると、代表校四九校のうち公立高校は十四校。その中でも県内でトップレベルの進学校と呼ばれる学校が四校あった。高校総体の他の競技もそうだが、彼らは他の進学校と同じように授業を受け、限られた練習時間の中で工夫し、結果を出している。練習環境を考えると、決して恵まれているわけではないだろう。しかし、その限られた条件の中で、何をどのように練習し、力をつけていけばいいのかを自ら考え、それを計画的に実行しているのだろう。

今年の修学旅行も七月十日から十二日までの二泊三日で実施された。コースが鎌倉のクラス別研修から始まり、GO鶴セミナー、東京ディズニーリゾート、東京散策に替えて今年で四年目になる。前の週は二日休校になるほどの大雨で、高速道路も土砂崩れのために通行止め。飛行機の時間に間に合うだろうかと心配されたが無事開通し、当日は朝の五時四十五分に学校を出発。空港では文系の搭乗するJAL機に卒業生の機長と客室乗務員が同乗するというサプライズが用意されていた。羽田空港に到着すると、我々を歓迎するかのような好天気。順調なスタートだった。

それから鎌倉で「とり飯御膳」を堪能し、高徳院の大仏の前で記念撮影をし、クラス別研修に出発。鎌倉の歴史ある寺院を巡るクラス、遠くは江ノ島や水族館を訪問するクラスなど、クラスのカラーが色濃く表れた研修になったようである。その後夕食は横浜中華街のレストランに集合。中華料理の食べ放題は生徒にも好評だった。

二日目は修学旅行の柱ともいえるGO鶴セミナー当日である。今年は創立一二五周年ということもあり、東京鶴丸会の計らいでJALとフォトシンスの二社にテレビ取材が入った。朝食から緊張した面持ちだったが、訪問後にディズニーリゾートに到着した満足げな表情から貴重な経験ができたことが見て取れた。午後からのディズニーリゾートでは、日頃味わえない夢のようなひとときを過ごし、修学旅行の想い出の一ページとしてそれぞれの胸に刻み込まれたことであろう。

最終日は、生憎の小雨となった。今年の東京大学訪問は、鶴丸のOBの教授に依頼し、講座をさらに二つ開設していただいた。また校内の案内を東大のボランティア団体にも依頼し、本校卒業生を含めて三七名の東大生に協力していただいた。先輩の講話や動物医療センターなどの施設を見学し、専門的で最先端の学問の研究を行っている大学の雰囲気を味わえたようである。

その後の自主研修を今年は東大から出発した。お台場の集合時間に間に合うだろうかと心配もしたが、さすがは鶴丸生。全員無事到着し、予定通りのメニューを全て終えることができた。

このように鶴丸の修学旅行は朝から晩までとにかく慌ただしい。他の学校が四日間で行うメニューを三日で行っている感じである。しかし、三日という限られた時間の中だからこそ、それを充実させるために、多くの時間を費やし周到な準備をしてきた。実際は、鎌倉研修・GO鶴セミナー・東京散策など全てがうまくいったわけではないであろう。しかし、その一連の過程の中で多くを学び、それが自分の将来の進路選択につながることもある。いかにも鶴丸らしい修学旅行である。

最後に、東京鶴丸会を始め、これまで準備から実施に至るまで、御尽力くださった旅行業者、職員、生徒、保護者、全ての関係する皆様に感謝申し上げたい。

東京大学訪問の一場面
（安田講堂にて）

感動は無限大

令和元年度南部九州総体（インターハイ）

14R　高山幸大君　三位入賞

七月二十六日～三十日まで霧島市の牧園アリーナで開催された令和元年度全国高等学校総合体育大会フェンシング競技大会（第六十五回全国高等学校フェンシング選手権大会）個人対抗男子サーブルの部において14Rの高山幸大君が強豪選手を倒し、全国三位入賞を果たしました。予選プールを三勝一敗の全体第十九シードで突破した高山君は、接戦をものにして勝ち上がり、準決勝では予選プールでも戦い敗戦した埼玉県の小久保選手と戦った。優勝した小久保選手に敗れたものの、予選プールよりも良い内容で、一年生にして堂々の三位入賞を果たした。

大会後「決勝トーナメント二回戦と三回戦で二点差という苦しい試合を乗り切ったのが大きかった。来年は、ぜひ優勝を目指したい。」と本人は試合をふりかえった。文武一道の精神で「苦しい試合を乗り切ったパワーで学校生活でもいろいろなことを乗り越えていきたい」と今後の抱負を語った高山君に続きほかの部活動もぜひ頑張ってほしい。

決勝トーナメントの結果は次の通り。

一回戦　15対6　辻中選手　清風高校（大阪）
二回戦　15対13　山田選手　慶應高校（神奈川）
三回戦　15対13　平山選手　川俣高校（福島）
準決勝　7対15　小久保選手　星槎国際川口（埼玉）

一年生東大オープンキャンパス参加

昨年度に引き続き、今年度も東京大学のオープンキャンパスに一年生二十一名が参加した。首都圏の大学の授業を体験し、大学生（卒業生）の話を聞くことで、今後の学校生活における学習意欲を喚起することができた。また、オープンキャンパスでは、本校四十回生で現在東京大学大学院農学生命科学研究科　生物制御化学研究室の中村英光氏に研究室の案内や説明をして頂き有意義な時間を過ごすことができた。また、二日目の夜には首都圏の大学に通う本校の卒業生との懇談会を持ち実際の生の声を聞き、参加生徒も刺激を受けたようだ。

中村先生の研究室にて

参加者の感想より

●オープンキャンパスに参加して、東大について知ることができたというのはもちろんだが、東京とはどんなものかということも学ぶことができた。自分たちだけで電車移動をしたり、町を歩いたり、計画を立てて行動したり、と「自分の力」で何かをすることが多かったので、自分の成長に繋がったのではないかと思う。また、同じような志でこのオープンキャンパスに参加した友人たちとの交流で仲良くなることができ、輪が広がった。参加してよかった。

●「テレビで見る東大」と「生で見る東大」は全然違うものだった。実際に東大に入ると、人の多さと建物からあふれる伝統に衝撃を受けた。模擬講義はやはりとても考えさせられる内容で最難関の大学のすごさを感じた。紹介や案内をして下さった学生さんはとても話し方が上手くて私もこんな風になりたいと思った。

●「実際に足を運んで自分で肌で感じる」ということの大切さがよく分かる二泊三日だった。今回、勇気を出して東大オープンキャンパスに申し込んだことで、友達が増えたし心を動かされた。私は、文理選択にも大きく関わるオープンキャンパスとなりとても参考になった。予定していたすべての企画に参加できてとても満足。この経験から学んだこと感じたことを忘れずにもっと頑張っていきたい。

●とても貴重な体験をさせてもらえたと思う。日々の勉強のモチベーションも行く前より上がった。密度の濃い講義、本格的な研究室、多くの素晴らしい学生たちなど、東大はどうせ学ぶならこんなところがいいなと思える大学だった。模擬講義を受けたり、展示を見たり、大学の様々な施設に足を運んで、インターネットで検索するだけでは見えてこない東大の良さを肌で感じられたと思う。

本校卒業生と懇談する参加者